

第35回日本口蓋裂学会総会・学術集会を開催して

実行準備委員長 歯科矯正学分野 朝日藤 寿 一

平成23年5月25日、26日の2日間にわたり当分野教授、齋藤 功 大会長（写真1）のもと、新潟市朱鷺メッセ・新潟コンベンションセンターにおいて第35回日本口蓋裂学会総会・学術集会が開催された。本学会は頭蓋顎顔面領域で発生する先天異常の中で最も発生頻度が高く、歯科領域の専門的な知識並びに臨床も要求される、口唇裂・口蓋裂に関連する学会である。学会員は主に形成外科・口腔外科・歯科矯正・言語各領域の臨床、研究に携わる医療従事者から構成され、新潟での開催は第7回（大会長 大橋 靖名誉教授）、第17回（大会長 花田晃治名誉教授）大会に続き18年ぶり、3回目の開催である。

平成23年1月の演題登録締め切りにおいては前大会の登録数を上回る演題数が登録され、順調な滑り出しと安堵していた矢先、3月11日の未曾有の大震災となった。一時は大会の中止、延期も検討されたが、「各施設における口唇裂・口蓋裂の臨床、研究について議論する場を提供することはわ

れわれの責務の一つである」との大会長並びに本学会の判断から、予定通り開催する運びとなった。

本大会のテーマは「心地よい医療の提供—不易と流行を見極めて—」であった（写真2）。不変の法則（不易）と時代の変化、価値観、感性ならびに科学的に妥当性のある新しい要素（流行）をどう癒させれば、患者様および医療従事者の負担軽減を考慮した質の高い医療を提供するかについて、本疾患の臨床、研究に携わる医療従事者の方々と考えたい、との大会長の意向を表したものである。

本テーマのもと、海外特別講演2題、教育講演1題、シンポジウム3つを企画した。しかし大震災の影響は海外特別講演に現れ、ノースカロライナ大学の Strauss 先生はアメリカ政府から渡航制限勧告が出され、大学が渡日を制限したため来日不可能となった。講演中止も検討されたが、“Skepe”を利用して、リアルタイムでの講演を行うことに変更となった。このような試みはかつ



写真1



写真2

て経験がなく、予定通り進行できるか直前まで不安であったが、リハーサルを繰り返し行ったこともあり、通信トラブルもなく、会場からの質疑応答も本システムで問題なく行うことができた(写真3)。また、当分野は日本において口唇裂・口蓋裂に関する多施設共同研究の中心的役割を果たしている施設の一つであるが、本研究に関連し招聘したヨーロッパのオランダ・ラッドバウト大学の Kuipers-Jagtman 先生(写真4)も一時来日が危ぶまれた。しかし「特別講演の演者が行かな

ければ学会が成立しないと思われるので、講演させていただく」とのことで来日されたが、関西空港から入出国し、日本での滞在はわずか2日であった。3つのシンポジウムに関してはどのシンポジウムも会場はほぼ満席となり参加者にとって興味深い内容であったことがうかがえた。

本学会を開催するにあたり新潟大学として「何を発信できるか」を常に考えてきたつもりである。大震災後の混乱の中、盛会裡に閉会できたことは医局員一同(写真5)の協力の賜と感謝している。



写真3



写真4



写真5